はじめに

入試現代文、国公立大と私立大の両方、記述型と選択肢型の両方を含んだ極めて模範的で標準的な問題を通して学力を伸ばす講座です。この時期に取り組んで価値のある文章と設問を集めて編集しました。
なお、授業を最大限実りあるものにするために、予習をして自分の解答をつくってから視聴しましょう。

予習について

全講義予習しましょう。問題にアタックして解答をつくってから授業に参加してください。

復習について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。その後、スタディサプリのアーカイブの問題などにどんどんアタックしてください。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る**　↓　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり対比発見のてがかりをくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし選択肢まで読んではダメ。たとえば、五択なら四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

（3　**論説では、本文最後の数行を先に目を通し、**テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）

1と2で充分な見当がつけば、4に移行してOK

4　**本文を冒頭から読む**

プランA……設問の傍線部や空欄にあたるたびに、それらを含む段落を読んでから解答する。選択肢などは、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

プランB……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。

記述式問題解答へのガイドライン

1 **字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり0点）

2 記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

3 **誤字・脱字・略字**はそれぞれ1点減点（とくに略字は印象悪いよ！）

4 **「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、1点減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→ ※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→ ※**句点なし！**（1点減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→ ※**句読点は一文字分！**（1点減点）

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！
○対比の表現（AではなくBである）！
○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意

……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）
○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。
○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇐ 心身
語句 ← 心身の一体性

（例）心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。この考察は、「道具」を見直す契機になる。

⇒ 一文・文

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で「**A↔B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C↔D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善↔悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**（わいしょうか）があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為（とうい）判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**
……本文中では、**「AとともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」**と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**
……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なしの誤り**
……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**
……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**
……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**
……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝(ひざ)がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13 **具体例は、一段、落ちる**
……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14 **比喩による説明は、一段、落ちる**
……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

目次

第一講〈小説〉記述型……竹西寛子『蘭』p. 8
第二講〈論説〉選択肢型　音楽論・音楽社会論……渡辺裕『歌う国民』p. 16
第三講〈論説〉記述型　言語論・日本語論・社会言語学……浅川哲也『知らなかった！日本語の歴史』p. 24
第四講〈論説〉選択肢型　日本文化論……土居健郎『表と裏』p. 32

第一講〈小説〉記述型　竹西寛子『蘭』

次の文章を読み、後の設問に答えなさい。

「どうしてそんな方向へ行くの？」

道順の違いをただす妻には答えないで、男は国道をどんどん逸れ、海と反対の方向へ車を走らせた。幾度か通った道であり、①今一度通る約束がありながら今日まで通れなかった道でもある。

水田が大きく左右にひらける中を、車の道だけはよく整えられていて、夫が勝手知った土地のように運転しているのが妻には不審であり、また不安でもあった。それにしても、帰りを急ぐ今日という日に、夫はいったい何を思い立ったというのだろう。

車は、ひとしきり水田地帯を走ってから、小さくこんもりした森と集落のある所に出たが、夫の答えを待っている妻を乗せたまま、また新たな水田地帯に入って行った。依然として遠くに山脈が続き、手前にいくつかの森があり、森がまた近づいては遠ざかって行く。

「ねえ、どこへ、どこへ行くの？」

女の声が荒くなっている。

男がやっと答えた。

「ちょっと廻り道をしてひとやすみしようかと思って」

陽は高くなっていたが、よく晴れていた空に、いつのまにか雲が動き出している。

車は間もなく水田地帯を抜けて、女には、丘を走っているのかと思われるような小高い段々畑の間を通り、やがて林道に入った。木立が鬱陶しくないほどによく繁り、車の行手に小鳥が飛び交っている。

「あら。向こうに見えるのは川？　それとも池なの？」

女の声が弾んだ。

林道のずっと奥に光るものがあって、みるみるうちにそれは湖だと女に知れた。

蝉の声が次第に多くなる。

「不思議ねえ。こんな場所に連れて来られるなんて、考えてもみなかったわ」

「もっとおどろくかもしれない」

妻は、片手で髪を撫でつけるようにしながら、夫は自分をねぎらってくれるつもりなのかもしれないと思った。妻の気持ちは上向いていた。

湖のほとりの叢に、男はワゴン車を停めた。②<u>妻を促して車から下ろすと、自分は後れて外に出た。</u>車の後部を確かめるようにして、妻よりも静かにドアを閉めた。

船着場に二艘の舟が乗り捨ててあるが、人影はない。女が先に立ち、男は後から水辺に立った。空が輝き、雲が輝き、水もまた輝いているように女には思われた。山肌が迫っているのに水面は暗くない。蝉しぐれで湖水が波立つかと思われるような静かさに、女はわが目を疑った。

「花が咲いてる。白い花が。あれは確かに花なんでしょう？」

湖が、入江のように彎曲しているあたりを女の指がさした。左手の岸辺の湿地に、白い小さな羽毛のような花が、惜しげもなく花弁を開いている。見る人もない湖のほとりで、霞むほどに咲き連なっている白い花の群落が、女にはあわれであった。「鷺草だよ。鷺が翅をひろげたように咲いているところからついた名前らしい」

③<u>男は、自分がもう何日も空気というものに触れていなかったような気がした。</u>女と並んで立ったまま、今度は自分で煙草に火をつけた。

湖を大きく庇っているような山脈が、男の疲れた眼には、二重にも三重にもうつって見えた。そして、そのほとりにひっそりと、清楚で優雅な鷺草の群落をもつ湖は、大地が両手で捧げる白い花飾りのついた器に、天が、恵みの水を注ぎ与えたもののようにながめられた。

「いい所だろう」

妻は素直にうなずいた。妻は、この何日かの間に、自分や夫が経験した辛く苦しかった出来事が、ここに来て信じ難く思われるほどで、前触れもなくこうした場所へ自分を運んでくれた夫に感謝せずにはいられなくなっていた。と同時に、男をいとおし

む情にも潤ってきた。ただ、④今はそうと相手に気取られたくなかったので、しきりに、花を愛でた。
男に心残りはあった。
遅過ぎた約束の果し方に無念の思いも改まっていたが、許されたい気持もあった。男は近くを見、遠くを見、そして空を仰いだ。
雲の動きが増して、風が出てきた。
蝉の声は絶えたが、風が止むと、その声は前よりもいっそう高くなって湧き出すように男には聞えた。
風が吹くたびに、風の足どりが、湖水に広く、狭く、また浅く深く刻まれる。大地の捧げた器の水は、時に軽やかにさざめき、時にやや重くざわめいた。
「行こう」
夫が先に立ち、妻が随った。
車に近づきながら、男は今一度振り返った時、ふと湖上に立つ老母のおもかげを見た。まだ病苦を知らぬ、甘えかかるような優しいおもかげだった。男はそのおもかげをわが身に封じ込めるように、そっと眼をふさいだ。
ワゴン車に乗り込む時、男は初めてカーテンの外側から話しかけた。
「また連れて来ますからね」
レースのカーテンに囲まれているのは、ドライアイスに埋まっている、男の老母の遺体だった。一年近い闘病の果てに、老母は昨夜、病院で亡くなっていた。
反対側のドアに廻った妻が、
「何か言いました?」
とたずねた。
⑤「別に」
と夫は答えた。

（竹西寛子『蘭　竹西寛子自選短篇集』集英社文庫）

問１　傍線部①「今一度通る約束がありながら今日まで通れなかった道」とあるが、通れなかった理由として二つのことが考えられる。本文の内容に即し、それぞれ十字以内（句読点を含む）で記しなさい。

問２　傍線部②「妻を促して車から下ろすと、自分は後れて外に出た」とあるのは、男が湖に来た本来の目的を妻に隠す行為とも受け取られる。これとは対照的な、目的を達成した後の男の思いを端的に示す表現を、本文中から十五字（句読点を含む）以内で抜き出して示しなさい。

問３　傍線部③「男は、自分がもう何日も空気というものに触れていなかったような気がした」とあるが、どうしてか、本文の内容に即し五十字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

問４　傍線部④「今はそうと相手に気取られたくなかった」とあるのは、どうしてか、本文の内容に即し五十字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

問５　傍線部⑤「『別に』と夫は答えた」とあるが、妻への回答をわざと外すことで、夫は妻に何を隠そうとしたのか、この湖に来た意図をふまえ、本文中の語句を用い五十字以内（句読点を含む）で説明しなさい。

第一講　知識モノ解説

文学史・筆者紹介

●筆者　竹西寛子＝たけにし　ひろこ（一九二九～）広島県生まれ。早稲田大学教育学部国文科卒。出版社勤務を経て小説家。受賞歴として川端康成文学賞、毎日芸術賞、野間文芸賞などがある。文化功労者

語句

ただす＝質す→質問して確かめる
　同音異義語　正す＝まがったものを真っすぐにする／間違いを正しいものにする
　　　　　　　糺す＝真偽や有無がはっきりしないものを調べてはっきりさせる
逸れる＝それる→離れる。違った方向に行く
　cf免れる＝まぬかれる
勝手知る＝かってしる→いつもの事情や状況についてよくわかっている
不審＝ふしん→変だなと疑いをいだくこと（例）挙動不審
　同音異義語　不信→信用しないこと（例）政治不信
　　　　　　　不振→勢いがふるわないこと（例）食欲不振
ひとしきり＝一頻り→盛んな状態がしばらく続き、やがて終わること
鬱陶しい＝うっとうしい→邪魔なものを払いのけたいような気持ち
ねぎらう＝労う→苦労や努力を認めてそれにふさわしい言動でかえすこと

惜しげもなく＝おしげもなく→ひかえてとっておくということなく
清楚＝せいそ→飾りけなく美しい様子
優雅＝ゆうが→上品な様子
いとおしむ＝愛おしむ→愛する。大切だと思う

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）質問を幾ドも繰り返す　①土　②怒　③度　④戸　⑤努
（イ）路上で不シン者を発見する　①審　②振　③信　④身　⑤心
（ウ）天候はイ然として変わらない　①以　②依　③緯　④伊　⑤位
（エ）虚飾なくセイ楚な身なりだ　①整　②聖　③青　④清　⑤静
（オ）優ガな身のこなしを見せる　①雅　②蛾　③画　④賀　⑤駕
（カ）珍しい植物の群ラクに出会う　①洛　②酪　③落　④絡　⑤烙
（キ）丁寧にイ体を安置する　①偉　②遺　③維　④医　⑤畏
（ク）湖沼とシッ地の多い地方　①湿　②質　③執　④室　⑤疾
（ケ）長いトウ病生活を支える　①闘　②倒　③統　④糖　⑤棟
（コ）太陽がシ第に昇ってくる　①史　②至　③支　④仕　⑤次

模範解答

第一講　模範解答

問１　・一年近い母の闘病。・鷺草の開花時期。

問２　夫が先に立ち、妻が随った。

問３　ここ何日かの間に、老母の死に関わる辛く苦しい出来事を、息を詰めるような緊張状態の中で経験したから。

問４　昨夜母を亡くし悲しみに沈む夫に妻としての情を示すのが、その場にふさわしくないと思われたから

問５　妻へのねぎらいのようでいて、実は母との約束を果たすためであり、母の遺体を車に乗せていること。

復習問題解答

復習問題　第一講　模範解答

（ア）③　（イ）①　（ウ）②　（エ）④　（オ）①
（カ）③　（キ）②　（ク）①　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）幾度　（イ）不審　（ウ）依然　（エ）清楚　（オ）優雅
（カ）群落　（キ）遺体　（ク）湿地　（ケ）闘病　（コ）次第